

[デザインノート]

パブリックスペースに関するフィールドワーク報告

—世田谷区北烏山屋敷林市民緑地におけるサイト・リノベーション—

杉浦久子・清水麻里

■はじめに

研究室では、建築の立場から人と環境、場所の関係をテーマに研究や設計活動、フィールドワークを行ってきた。本稿では2007年度に行った主なフィールドワーク、並びにこれらに関して発表を行ってきたものを「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—世田谷区北烏山屋敷林市民緑地におけるサイト・リノベーション—」としてまとめ、報告するものである。

■サイト・リノベーションの定義と経緯

私たちが日常、空間で生活しているときには、建築も町も、連続的に空間体験している。個別の建物のみならず、繋ぎの空間も面白くならないと町は活性化しないのではないかと、との思いからこのような活動に、およそ10年前から着手することとなった。スクラップ・アンド・ビルドの時代から、既にあるストックを見直してゆく時代へと変移する中で、当たり前のものでありそこに存在している建築のみならず、様々な既存空間の質を再発見し、顕在化させ、新たな場をつくり出すことも、建築的命題であると考えている。また、広い意味での既存のパブリックスペースや、場所の問題を考えることは、まちづくりとしての意味を持つかと思う。

社会のインフラの大半が整えられた今日では、単に建てることのみならず、既存にあるものに加えることや差し引くこと、変更することや、積極的な意味において建てないことなど、場所に建築を建てるという行為そのものや、既にある場所の意味を見出し、建築物だけでなく人を含む空間全体を関係づけてゆくような空間環境をつくることを「サイト・リノベーション」と定義する。今日こうした方法論が必要になってきていると考えられる。

■パブリックスペースにおけるサイト・リノベーション

ここで言う「パブリックスペースとは、文字どおりの公共空間と、私有地であっても公共性が高いと考えられるスペース」を指す。ポテンシャルは高いが、あまり活用されていない場所を活性化させる方法として、インスタレーシ

ョンというアートの手法を用い、地域コミュニケーションや、場をより良く使うことを目的としてプロジェクトを行ってきた。まさに(仮設)空間を設置し「場」に「出来事」を起こすことで、サイトの持っている意味を顕在化させたり、変化させることを行ってきた。

今回の報告は世田谷区北烏山屋敷林市民緑地という私たちが日常暮らす場所において行ったプロジェクトについてであるが、大学と地域との連携により、地域の問題や特性を顕在化できると考えている。その場にある様々なストック(人、もの、空間、環境)の有用性はそこで暮らす人々にはむしろ見えにくくなっているということもある。それらの魅力的なストックを発見し、積極的に利用することにより、場所の特性が顕著に現れる空間となる。

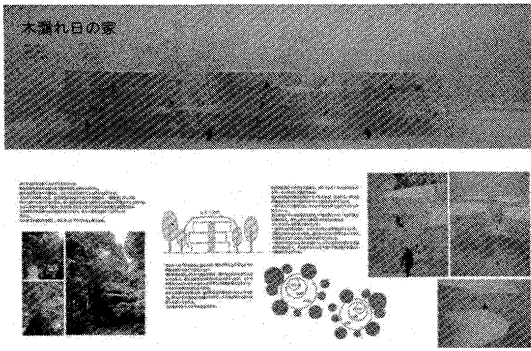
このような実践は結果としてサイトの地域資産を使いながら、既存空間の質を再発見、顕在化させ、新たな場を作り出すことになる。そこで、このような一連のフィールドワークを「サイト・リノベーション」と呼んでいる。

■平成18年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定取組

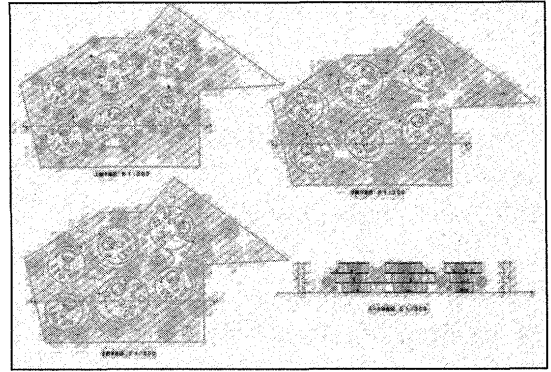
「せたがやの環境共生の人づくり・街づくり～地域とつくる継続的な次世代リーダー育成プログラム～」という大きなテーマの中で、杉浦はコーディネーターとして、世田谷区内での具体的なフィールドワーク「せたがや家(いえ)・庭(にわ)・訪問」という6回の活動を企画した。また、これらの活動報告を季刊誌『世田谷ライフ』(エイ出版)という一般雑誌に掲載していただき、世田谷での試みを全国に情報発信してゆくことを計画した。

■「せたがや家・庭・訪問」の目的

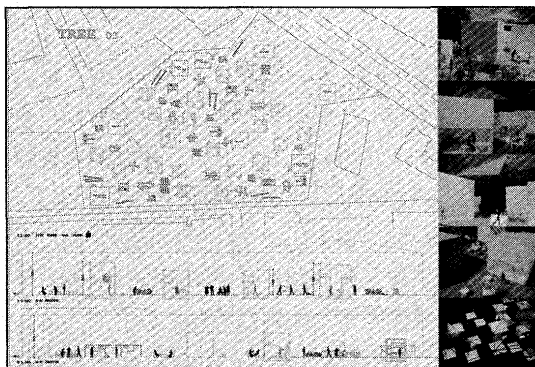
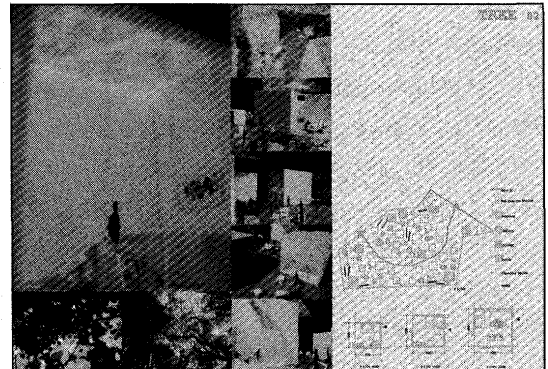
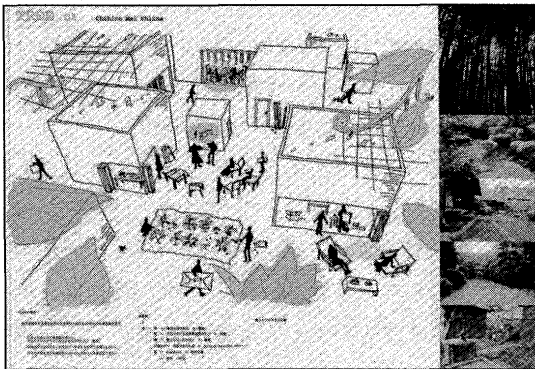
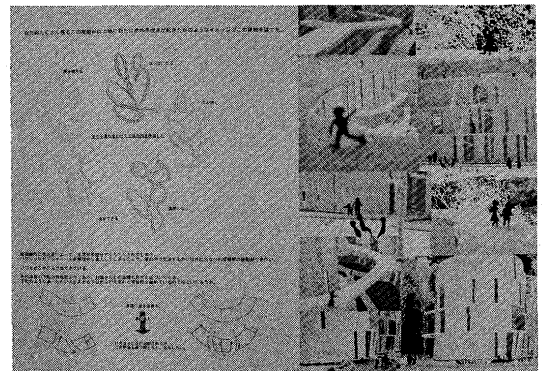
持続可能な社会を構築してゆくには、現在ある地域の資産や知恵を共有して、生活を継続的に発展させる住民の力と資源を活用して、安心して暮らせる街を創出する地域活動が必要になる。そのために、世田谷区内にある豊かな自然、歴史、文化、街について学生が「せたがや machi (マチ)-ecom (エコム) 隊」となって現場に出掛けてゆくことで、様々な体験を通じて知識を深め、住民の方々とも連携



佐々木佳織・鈴木麻子・阪西麻依



小館祥子・栗原葵・齋藤五月



金子詩菜・坂本千尋・鈴木舞

設計製図3年前期(杉浦担当)
「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」
(合同講評会発表作品より)

し、地域と大学のコミュニケーションが進展することを考えた。

「せたがや家（いえ）・庭（にわ）・訪問」では、世田谷にある、家、庭、まち等、実際の場所をリサーチし、使用させていただきながら、地域ストックとして価値ある場やものを顕在化させ、紹介してゆくことを目論んだ。

■せたがや家・庭・訪問

第1回「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」

2007年7月29日（日）から8月4日（土）、北烏山9丁目屋敷林市民緑地にて『せたがや 家・庭・訪問 第一回「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」』を開催した。

屋敷林（やしきりん）とは、「家屋の周囲に暴風や防火のために植えた樹林」を指す。（出典：大辞泉 小学館）

「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」は、世田谷区に残る都市の中の貴重な森と懐かしい農家の佇まいの中に、ゆっくりと楽しめる空間を設置するという企画である。地域資産でもある屋敷林を、地域の人たちに知っていただき、この都会の緑をより楽しんでいただくために行った。

この企画は大きく3つあり、まず、期間中通しての空間設置である「cobweb」。それから7月29日（日）と8月4日（土）の2度行った、周辺の「自然観察まち散歩」、学生手作りの茶菓による「オープン・ガーデン・パーティー」がある。

■「cobweb」プロジェクトの概要

現代GP環境のmachi-ecom隊に杉浦研究室の学生が有志で参加し、「cobweb」という空間設計を行い、セルフビルドで設置した。ロープを屋敷の木々に渡し、交点にクモの巣を編んで座ってもらおうというアイデアは、この緑豊かな空間でもっとゆったりとした時間を過ごしてもらいたいという学生たちのディスカッションの中から生まれた。

会期中は親子連れ、カップル、友達同士など様々な人が訪れ、「cobweb」に座ったり、寝転んだりしてくつろいだ。子供たちにとっては遊具にもなったようである。「cobweb」に座ると、適度な揺れと木々の間にぶかぶか浮いている感覚を味わうことができる。また、寝転べばみどりを下から眺められるといういつもと違う視線が体験できる。来訪者からは「座っているだけで‘身’‘心’気持ちよくなった」、「ねころんで揺らされるのがとても楽しい」、「時間を忘れてくつろげる」などの感想をいただいた。また、真夏日にもかかわらず、屋敷林の中は涼しく、「緑に囲まれているだけでとても涼しい」、「自然と一体化している感じがよい」などの感想もあった。

■「cobweb」設計のプロセス

1. はじめに

研究室では、当たり前のものとしてそこに存在している既存空間の質を再発見し、顕在化させる新たな場を作り出すことを、「サイト・リノベーション」と名づけ、毎年プロジェクトを行ってきた。今回は「現代GP環境」にも関連させこのプロジェクトを展開させた。

2. プログラムが決定されるまで

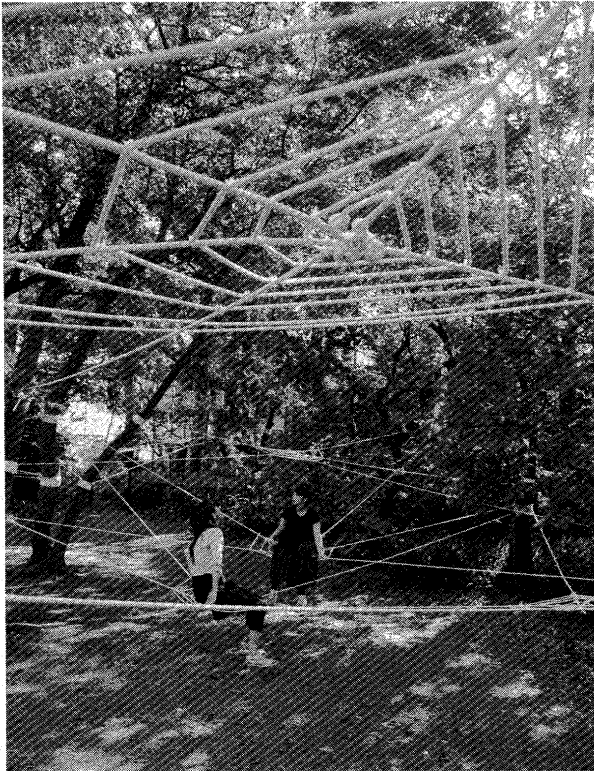
空間設置「cobweb」プロジェクトは2007年4月に始まった。その時点では「環境的、地域資産を活性化する」という大枠が決まっていただけであった。財団法人世田谷トラストまちづくりの方に紹介していただいた「北烏山屋敷林市民緑地」は敷地候補のひとつとして挙げられていたが、未定の状態であった。その後、研究室のメンバーで屋敷林を見学に行き、敷地を北烏山屋敷林市民緑地に決定した。

「北烏山屋敷林市民緑地」は市民緑地として制定されており、個人のお宅でありながらパブリックに開かれた場所である。市民緑地制度とは、「都市に残された民有地のみどりを保全し、豊かな環境を未来に残していく」ための制度である。財団法人世田谷トラストまちづくりが土地所有者と契約を結び、私有地を地域に公開することによって憩いの場としてみどりを活かす。市民緑地に指定されると、所有者はみどりの維持管理や固定資産税・都市計画税・相続税について多少の優遇措置が受けられるなどのメリットがある。（財団法人 世田谷トラストまちづくり発行『わが家のみどりをのこしたい わが家を地域にいかしたい 市民緑地/小さな森/地域共生のいえ/のご案内』より要約）

現在世田谷区内には市民緑地が5ヶ所指定されており、なかでも「北烏山9丁目屋敷林市民緑地」は最大規模である。所有者が市民緑地への指定を検討した一番の理由は、先祖代々の土地とみどりを守るためであった。私有地を市民に開放することは防犯上不安な点もあるが、地域資産を共有し使いながら守ることは地域コミュニティ形成のきっかけとなり、地域活動の場を提供することにもなると考えられる。

4月中旬から週1回のミーティングを行った。まずは参加学生が敷地を見学して気づいたことを話し合い、空間設計のアイデアをディスカッションした。様々な意見が出たが、「高さを感じる空間なので木の垂直性を生かしたい」、「木がドームのようになっているので上を見たい」、「木々を屋根に見立てて足元に空間設置するのはどうか」など、最終案に結びつくアイデアが出始めた。

5月11日、石井准教授、筆者、杉浦研究室の学生3人の計5名で屋敷林の所有者である下山さんのお宅に挨拶に



cobweb に座って木々を見上げる



5月11日 屋敷林内を案内していただく



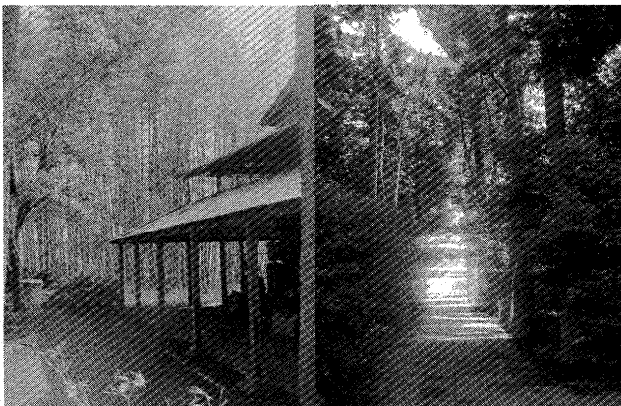
5月18日 下山さん宅を訪問



縁側に座ってゆったりとした時間を過ごす



6月8日 クモの巣案生まれる すずらんテープでの実験



屋敷林内の竹林

エントランス



研究室でのミーティング

伺い、「せたがや家・庭・訪問『屋敷林オープン・ガーデン&ハウス』」の趣旨説明を行い、敷地の使用許可をいただいた。この時点ではまだ空間のデザインは決定しておらず、具体的なプレゼンテーションは行えなかったが、地域コミュニティ活性と空間の有効利用、地域資産への理解という趣旨にご賛同いただいた。

5月18日、再び杉浦研究室の学生15名程度が下山さん宅を訪問した。学生を快く受け入れてくださり、昔の農業の様子、養蚕を行っていたこと、屋敷林の住宅の変換、地域の小学生を招いて白菜の収穫祭を毎年行っていたこと、みどりの維持管理のお話などを聞かせてくださった。「屋敷林オープン・ガーデン・パーティー」の企画についても打ち合わせを行った。また、学生たちで屋敷内の木々の測量を行い、図面を作成した。

6月、毎週のデザインミーティングと現地での実験を繰り返し、方向性が決定する。「ロープを張るクモの巣案」と「トランポリン案」の2案が最後まで残ったが最終的にクモの巣案に決定した。

図面をもとに屋敷林の現状模型を作成した。模型によりデザインを決定し、プレゼンシートを作成して下山さんにプレゼンを行った。

3. 材料と構法の検討

アイデア決定後、材料と構法の検討に入った。クモの巣のロープの種類、太さ、色、木とのジョイント方法、編み方、形状など、について具体的に決定していった。

6月中旬、各学生が担当を決め、材料の選定を行い、ミーティングの中で実際に使用実験を繰り返しながら取捨選択を行った。選定の結果、使用するロープはヨット用のものとなり、6月19日に現場にて直径6mmのヨット用ロープで実験を行った。

6月下旬、ロープの最終決定。ヨット用ロープの直径10mmと直径8mmと決定した。木とのジョイント方法については、アウトドアや救命で伝統的に使用されてきたロープワークの手法を用いた。「トラッカーズ・ヒッチ」という結び方を主に利用し、その他に「ハーネス・ループ」、「ボーライン」、「クローブ・ヒッチ&ハーフ・ヒッチ」という結び方についても練習を行った。

4. デザインの検討

材料と構法の検討と同時にこの手法を使った空間デザインについてもメンバー全員が週に2・3回集まり、アイデアを出し合った。(展開するエリアの検討、形、高さ、ロープを結ぶ位置など。)また、模型や図面を作成してスタディし、現場で実験してフィードバック、という作業の繰り返しで

あった。コンセプトとして「人間が木々に寄生するイメージ」を表現するため、より軽やかではかない表現を求めた。

「cobweb」というプロジェクト名は英語で「クモの巣」を意味する。その他にも、混乱・曖昧・情報発信などの意味がある。ここでは木々や人々がつながってゆくイメージも表現したいと考えた。

デザインを考える上で学生たちが大変だった点は、屋敷林に実際に生えている木を利用するため、1本1本の枝や幹の具合に左右され、測量した図面にはデータを落としていたが、最終的デザインの具体的な決定はすべて現場で行わなくてはならなかった点である。

現場での実験を重ねるうちに、学生たちはプロジェクトの魅力を発見していったようである。ロープという素材が環境に寄り添うことのできる素材であるということ。固有の形を持たず、他律的であること。場所性を反映した形を作ることができること。また、再現可能性があること。(会期中、学生たちが毎朝ロープを張り、毎晩ほどく予定であった。)

座面が連動してゆくこと。(ひとりが座ると他の場所も少し沈む)というおもしろさも現場で発見し、体感することで形が決定されていった。

5. セルフビルド

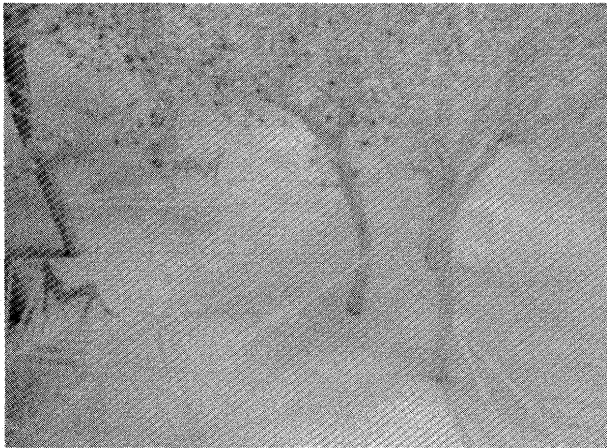
7月、本番用のロープを使っての実験に入った。ここからはロープの張り方についての試行錯誤が続く。会期前1週間は朝8時に全員が屋敷林に集合し、日没まで作業を行った。

使用したロープは計1000m以上になった。すべて研究室の学生のみで施工を行った。ロープを毎日設置し、撤去するという一方で、即効性が求められたため、取り外しの簡単な手法を検討した。その結果、一部を固定し、木々にジョイントする部分のみをフリーにすることとなった。たるみなく水平にロープを張るのはかなりの力が要る。高いところに結ぶ場合は脚立に乗っての作業である。加えて大量の蚊。屋敷林のつくり出す木陰に救われたが、一日中続く屋外での作業は体力的に厳しいものであったと思う。それでも、学生たちは皆夢中で頑張っていた。

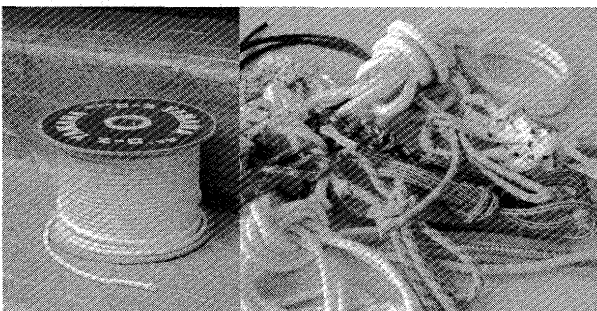
日々の練習の甲斐あって、3時間以上かかっていた設営作業が、会期前日には40分で出来るようになった。

6. 管理と運営

7月29日(日)会期初日の朝、7時に全員現場に集合し、設営を行った。空間の設営だけでなく、看板や受付の設置、アンケートや記帳の準備も行った。また、「せたがや家・庭・訪問『屋敷林オープン・ガーデン&ハウス』」(cobweb

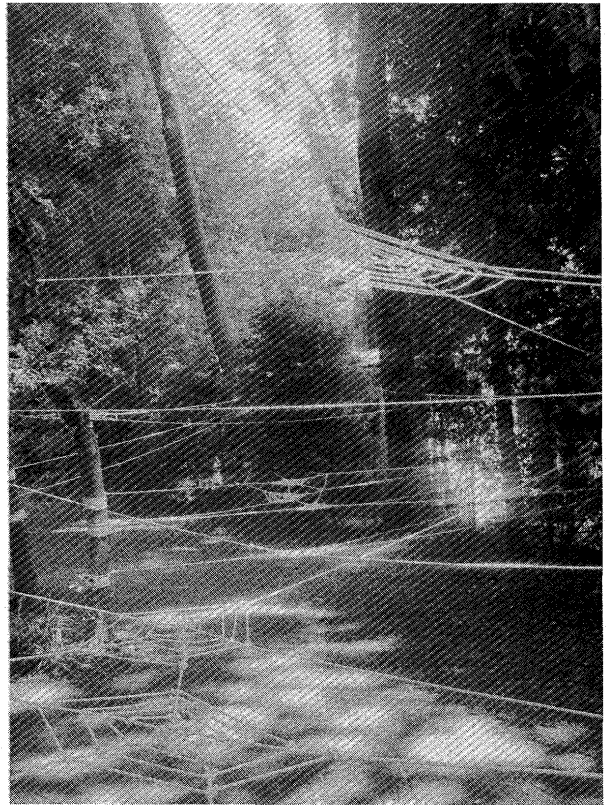


模型を作成してデザインを検討

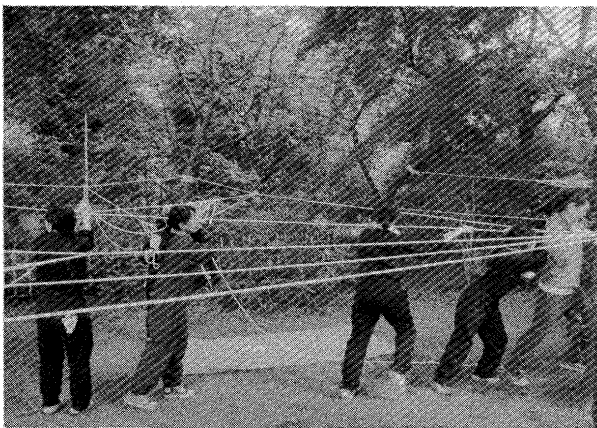


使用したロープ

検討した数々のロープ



cobweb 全体の様子



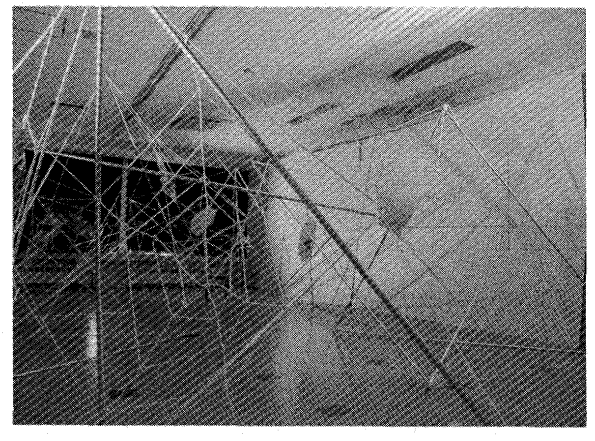
全力でロープを引っ張り上げる



研究室メンバーと下山さんで記念撮影



手作りのお饅頭とお赤飯でもてなして下さる



コスモス祭での展示

プロジェクト)の趣旨や経緯を説明するファイルも作成し、来場者に見てもらえるようにした。また、駅周辺や会場入り口でチラシを配布して呼び込みを行った。「自然観察まち散歩」と「オープン・ガーデン・パーティー」も開催し、このイベントには60人以上の来場者があった。午後、突如の雷雨に見舞われロープの撤去が難しい状況になった。そのため敷地内に立ち入りができないよう入り口を嚴重に閉鎖し、屋敷林の入り口もチェーンをかけるなどの対応をとった。

7月30日(月)~8月3日(金)の間は研究室の学生が4人ずつ交代で見張りと案内、朝晩のメンテナンスを行った。やはり平日は来場者が少ないが、気に入って毎日来てくださる親子連れや子供たちも結構いらした。

8月4日(土)最終日。天候もよく、「自然観察まち散歩」と「オープン・ガーデン・パーティー」もあり、多くの来場者があった。研究室の学生数名がエプロンを着用してお茶とお菓子を運び、交代で来場者に「cobweb」の説明を行った。会期を通じての来場者は概算で200~250人程度であった。

■地域の人との交流

「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」の企画がスムーズに運営された背景には、屋敷林の所有者である下山さんのご協力があった。

下山さんには屋敷林の使用をご許可いただいたのみならず、自発的に蚊の駆除の薬を撒いてくださるなど、多くのお心遣いをいただいた。「オープン・ガーデン・パーティー」の時には家屋の縁側を開放していただき、トイレも使わせていただいた。キッチンと冷蔵庫もお借りした。

作業の合間にはたびたび差し入れを下さった。手作りのお饅頭やおせんべいなどを用意して待っていてくださった。昼食を出してくださることもあった。暑い日の冷たい飲み物の差し入れに学生たちは疲れを癒やされたようである。学生たちが頑張れたのも、こうした下山さんの存在があったからであると思われる。

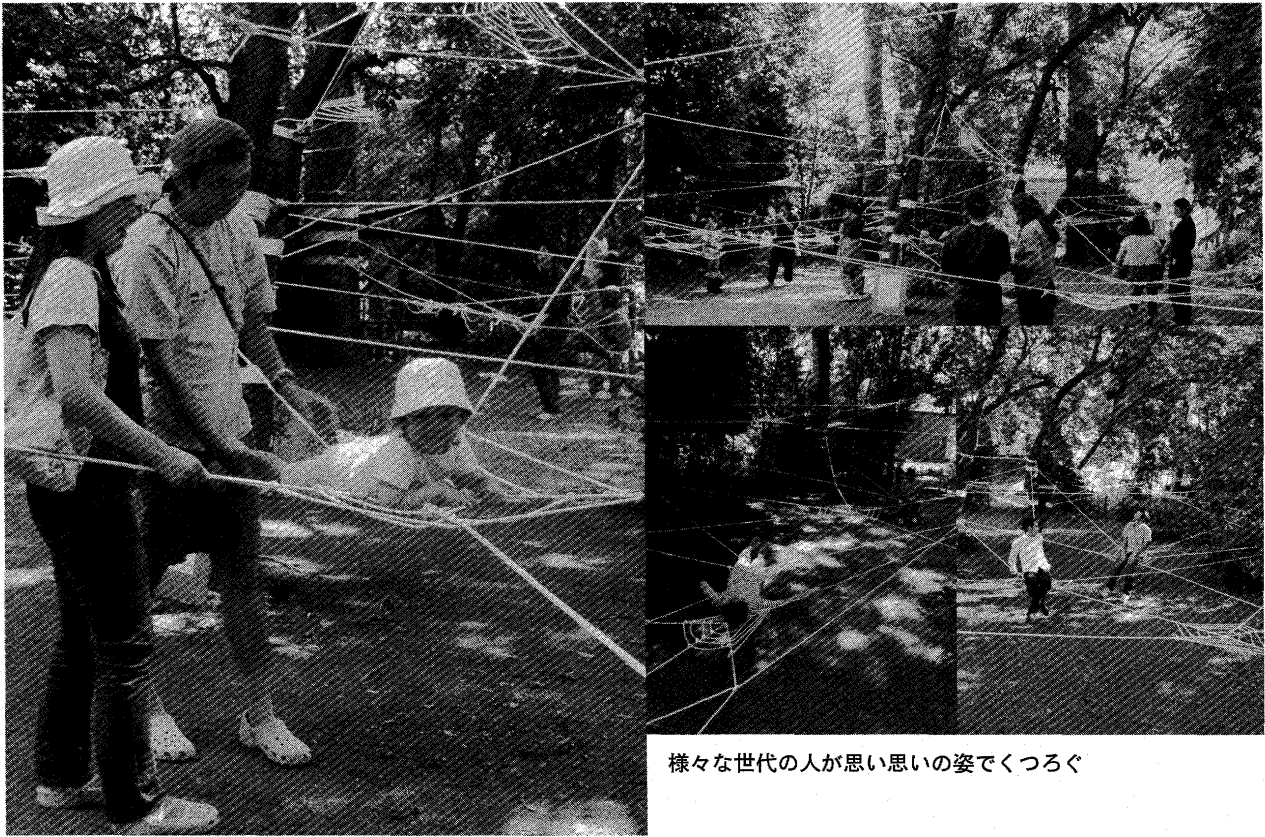
学生たちからのお礼として、8月5日の撤収作業の際、かねてからの要望であった下山さんの別邸の掃除を行った。また、メッセージボードを作成し、感謝の言葉と写真をプレゼントした。

会期中、あるいは連日の準備中にプロジェクトを通じて下山さんはじめ地域の様々な世代の方々と交流が起こったことは、大変意義のあることだと感じている。あまり知られていなかったこの場所に、興味を持って中に入って来られた地域の人々は大人から子供まで沢山いらした。また、チラシ配布の際などにも多くの方々から声をかけられた。

地域の様々な世代の方々同士が交流し、この地域資産について知っていただけたことは、とても意義深いことであり、学生の実学的な学習の場となった。

■コスモス祭での展示発表

「せたがや家・庭・訪問」「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」の中で行った「cobweb」プロジェクトの空間設計、設置プロセスを昭和女子大学秋桜祭(2007年11月10日、11日)にて発表展示を行った。この展示に向けて計画、準備、設営を行ったのは筆者の研究室3年生の有志10数名であった。烏山の森にクモの巣が張り巡らされた現場のイメージを、小さな教室という不利な条件の中で表現しなくてはならないため、9月中頃からデザイン・ミーティングが重ねられた。その結果、アルミのチューブとロープを使用し、テンセグニティ(発明家バックミンスター・フラーの考案した構造体)を応用し、空間の中で自立的に存在し、テンションをかけたロープにクモの巣が張ったイメージを表現し、屋敷林で行った活動報告としての写真や、プロセスの模型などを展示した。多くの学内外の来場者に学生らは説明を行い、現場での活動内容を広く伝えることに効果があったと考えられる。



様々な世代の人が思い思いの姿でくつろぐ

cobweb プロジェクト開催中の様子 近隣の家族連れ



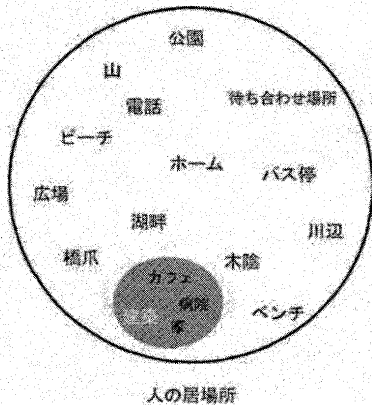
cobweb 展開エリア

烏山9丁目市民緑地 (屋敷林配置図)

■デザイン手法の方向性とまとめ

1. 居場所

人が生活するなかでの居場所には実に様々な場所がある。自分の部屋、ホテル、カフェ、病院、公園、ホーム、待ち合わせ場所、木陰、川辺、ビーチなど自然の場所、都市の中、内部空間、外部空間、建築、インフラ、色々な居場所がある。それらをみな等価なものと考え、私たちの暮らす生息域のように捉えて居場所をつくる。



2. 環境のサイト・リーディング

まず、わたしたちの暮らす場所、環境をリサーチし、リーディングを行う。そして、その場所に最小の空間設置を加え、場所に状況をつくる。生物が環境の中に巣を築く行為のように、生態学的な行為のようでもあり、それは建築的営為である。

3. 最小限の仕掛け

あるアクティビティを行うための可能性のある場所を発見し、そこに最小限の仕掛けを施す。最小限の仕掛けは用いる素材、作業行程などデザインの様々な場面で展開される。

4. 参加のデザイン

これらの作品の制作、施行、設置は多くの人の参加によって成り立っている。したがって、どこでも手に入るような素材で、だれでも参加しやすい手法でデザインしている。

5. プリミティブ

多くは人々が日常生活の中で獲得した技や智恵、経験があればできるような手法が用いられている。cobweb (クモの巣) ではアウトドアで古今東西で使用されてきたロープワークの技と智恵を利用している。

6. コトや状況のデザイン

モノをつくらうとしているわけではなく、その場所で何かコトや、ある状況が起こることを期待して空間を設置している。しかし、それらは予定調和的な出来事が起きることを考えているわけではない。この場を訪れる人々が勝手に様々な行為を行うことを許容し、むしろ偶然に様々なコトが起きることを期待している。

7. 環境に呼応する

場所の状況をリーディングし、ポテンシャルのある場所を発見する。そして、環境に対して最小限の作為でみんなの居場所をつくる。これらの居場所はサイトの条件を様々な読み込み、環境に呼応した建築的営為であると考えている。

■安全上の留意点

1. 管理運営上の留意点として、開催中、学生による見張りをたてて安全な利用をサポートした。(期間中、保険加入済み)
2. デザイン上の留意点として、ロープの高さは、大人が少しかがめば通過でき、かつ、子供の手が届く高さに設定した。また、ロープに腰掛けた際には足が地面に届く高さとした。

■設計製図、修士設計指導での取り組み

筆者が担当するいくつかの授業課題において、上記の環境 GP の 2 つの活動に関係させた課題を試みた。

設計製図 3 年前期 (II-1) (杉浦)

「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」に関連して、市民緑地でもある下山さん宅でその経緯などのお話を伺い、烏山地域をリサーチし、緑や農家という環境資源を生かしつつ永続的な住まいの環境を提案する「新しい都市居住を世田谷で考え実見する—オープン・ガーデン&ハウスの提案 まちに開かれた家—」という課題を出した。課題 1, 2 では個人で烏山周辺リサーチから個人設計提案を行い、課題 3 では 1 グループ 3 名で「オープン・ガーデン&ハウスの提案 (集合住宅)」という課題を行った。下山さん宅に大いに触発され、古くて新しい生活スタイルの提案に結びついた力作がみられた。

また、杉浦研究室修士 2 年清水麻里「畝のある風景—「農」をコミュニケーションの核としたコレクティブハウスの提案—」のテーマにおいてもこの活動から影響を受け、設計活動まで結びついた事例であると考えられる。

以下は清水麻里によるこの修士設計についての記述である。

■修士設計について

研究の目的と背景

研究室の活動として参加した「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2006」では新潟県十日町のコミュニティに触れた。2007年「cobweb」プロジェクトでは都市農地の現状を知った。それらの活動を通じて体験したことをもとに、個人のみどりを保存し、地域のみどりとして活用していく方法を提案したいと思った。

集合住宅設計提案

「農」をコミュニケーションの核としたコレクティブ居住

このテーマは以下の三点に注目したものである。

- ・地域のみどりを守り、はぐくむことのできる住まい
→農家の新しい経営形態の提案
- ・都心で良好な住民間（地域間）のコミュニケーションを発生させる住まい
→「農」をコミュニケーションの核としたライフスタイルの提案
- ・血縁や婚姻関係を越えた住まい方もできる住まい
→コレクティブ居住の提案

本計画では、多世代賃貸型コレクティブハウスと農業体験農園のプログラムを融合させる。従来のコレクティブハウスはコモンミールが主なコミュニケーション手段であったが、本計画では「農」をコミュニケーションの核として用いる。農地所有者が大家+園主となり、市民に住宅と農園を貸し出す。さらに、地域住民にも農業体験農園の一部を貸し出す。農園利用者は園主の指導を受けながら農業に従事する。

設計概要

用途: 多世代型コレクティブハウス（賃貸）+農業体験農園（農地の一部は市民に貸し出す。）

コミュニティ施設（内容: 広場、ライブラリ、タワー、農業用具倉庫、野菜直売所）

敷地: 世田谷区北烏山6丁目・9丁目地区

最寄駅: 京王線千歳烏山駅

総戸数: 281戸 総農地面積: 7,983 m²

敷地

本計画は北烏山9丁目屋敷林市民緑地の北側を中心とした敷地に計画した。また、烏山通りを挟んで北側に敷地を広げることにより、住宅と農地の混在する風景をつくりだした。

設計ポイント

全体計画

- ①農地と住宅（都市的空間）が混在するランドスケープ
- ②地域に開放する5つの施設
- ③屋敷林: 敷地内に現存するケヤキを移植

畑専有面積

畑専有面積の最小値を15 m²に設定した。

住宅

標準タイプ1棟あたり 総世帯数: 28世帯

住戸専有面積: 17.2~68.8 m²

畑専有面積: 15~34.4 m² 家族構成: 1~4人

共有スペース: ウチのあぜみち、ソトのあぜみち、ヤネのあぜみち、キッチン、ランドリールーム、シャワー&バスルーム、ライブラリ、倉庫

①畝: GL-1850 mm, GL-1450 mm

畑に落とす影をなるべく減らすため、1850 mm 地面を掘り下げて住宅を建設する。1階床スラブはGL-1450 mmである。この数値は、人間のアイレベルから決定した。1階から畑部分を見るとちょうど目の高さに作物が見え、掘り下げた部分と畑の連続する断面は、まるで畑の畝のようである。

②つながりつつ分節する

設計するにあたって基準としたのは、畑の専有面積である。つながったひとつの空間でありながらもコーナー性（「あちら」と「こちら」）をつくりたいと考え、作り出したピースを連続させ、住宅をつかっていった。

③ウチのあぜみち

ピースを連続させた二棟の間に曇りガラスの屋根をかけて半屋外、半屋内の空間「ウチのあぜみち」をつくり出す。この場所をもっとも特徴的な共有空間である。路地のような、ストリートのような、それでいて庭のような。都市的空間と私的空間の中間領域である。

④共有空間

ウチのあぜみちのほか、住宅外部の「ソトのあぜみち」、屋上の「ヤネのあぜみち」も特徴的な共有空間である。

まとめ

地域資産として重要な意味を持つ屋敷林や都市農地をそのまま残すことは、残念ながら大変な困難を伴う。都市農地のリサーチやコレクティブハウスの見学など、フィールドワークを通じて実際の居住者の声を聞き、主の意思を汲みつつ、現代的ニーズとの兼ね合いを図った提案を行った。

うね 畝のある風景

「農」をコミュニケーションの核としたコレクティブ居住の提案

背景

本提案の背景には
修士2年間の活動を
通じて出会った、
3つの事柄があります



新潟県十日町市における【地域力】

私の興味—集まって住むこと
集まることよって空間と時間を合理化
→よりゆとりのある豊かな暮らし

私の疑問—同じ家に住めば家族？
家族構成に定型がなくなっていく現代社会
→家族だけが同じに住むことに疑問を感じる

一冊の本
「家業と住まいの家 血縁から(暮らし様へ)」
血縁や地縁関係を絶たない住まい方をしている10人と建築家、社会
学者へのインタビューをまとめた本
→コレクティブハウスの存在(暮らし様で)住まい方という
考え方を知り、可能性を感じる

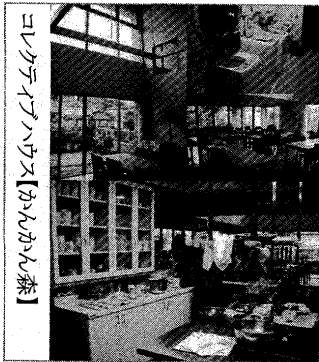


世田谷区鳥山【屋敷林】と【都市農地】

リサーチ①

時間的、空間的ゆとり。
集まって住む豊かさ。

「コレクティブ」な
暮らしに可能性を感じ、
実際に行ってみました



コレクティブハウス【かんかん寮】



【松森コンズ】シェアード型コレクティブリビング

定義
1棟あるいは一住宅団地内に、独立した集居性戸のほか、
豊かな共用部や設備が組み込まれている住宅

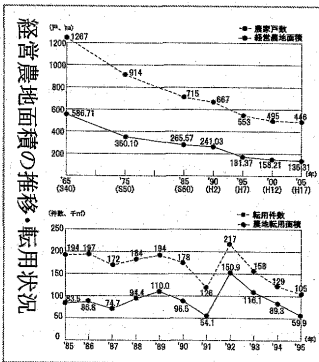
歴史
1970年代、北欧の働く女性たちによって考えられた
すべての人に開かれた住コミュニティだが、特に
・小さな子供を持つ共働き金銭世帯
・手狭が拡大したシニア層
に支持され、取り込まれている

共用室＝住戸の延長

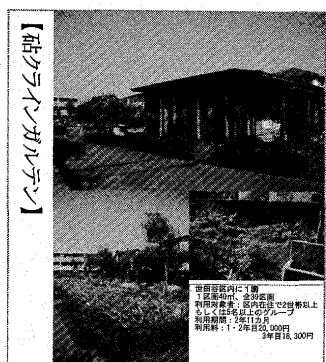
リサーチ②

「世田谷の農業」は
今どうなっているの？

現状を把握し、
新しい取り組みにつ
いても調べてみました



【ファミリー農園】(区民農園)



【松クワイガールズ】



会員制貸し菜園【アグリス成城】



市民参加型農業【農業体験農園】

農業体験農園とは？
農家自らが開設する農業体験農園は、農地所有者と入園者が一体となって農業を行なう市民参加型の農業です。
平成9年に練馬区ではじめて開設されました。
世田谷区では平成18年3月に「羽根木農業体験農園」、平成19年3月に「千歳台体験農園」が誕生しています。

特徴
農園主が講習会等を通じて入園者の疑問に答え、技術の指導に当たる
→初心者でも高品質の農産物が収穫できる
農地所有者は農業経営者としての作業をレクリエーションとして入園者に体験させる
→収穫や販路に関する作業の省力化と所得の安定を実現できる
農地所有者が自ら耕作する農地である
→生産地であれば相続税軽減措置の対象となる

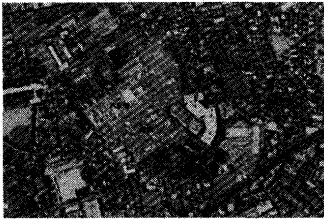
都市住民と「農」の出会いの場

敷地

宅地化されていく都市農地

先祖代々の土地を守るため
その土地に住まいながら
屋敷林を市民緑地として
パブリックに開く

それは地域資産
残したいみどり

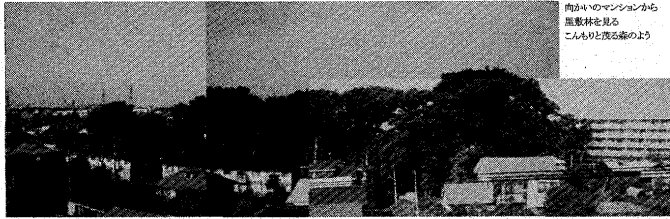


八反畑

以前 下山さんが所有していた「八反畑」を 現在所有している畑となぎ、さらに鳥山通りを挟むことにより、連続するランドスケープをつくり出す。



昭和29年頃の下山さんの畑

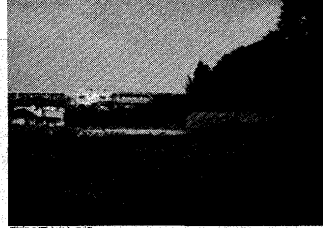


市民緑地制度

都市に残された民有地のみどりを保全し、豊かな環境を未来に残していくための制度。
財団法人「世田谷トラストまちづくり」と契約を結び、地域に公開することによって憩いの場としてみどりを活かしながら守っていく。所有者は維持管理や固定資産税・都市計画税・相続税について優遇措置が受けられる。



北鳥山9丁目屋敷林市民緑地



現在の下山さんの畑

設計概要

用途

畑付き集合住宅+付属施設
レストラン・ライブラリタワー・広場・野菜直売所・屋敷林

敷地

敷地: 世田谷区北鳥山6・9丁目
用途地域: 第1種低層住居専用地域 第2種高度地区

データ

敷地面積: 37,303㎡ 総戸数: 281戸
建築面積: 9,457.3㎡ 総農地面積: 7,983㎡
延床面積: 16674.8㎡

設計ポイント

地域の緑を守り、はぐくむことのできる住まい
→ 農家の新しい経営形態の提案
住民間・地域間コミュニケーションの生まれる住まい
→ 「農」をコミュニケーションの核としたライフスタイルの提案
時間や空間を合理化し、暮らし縁で住まうこともできる住まい
→ コレクティブ居住の提案

下山さんを業主+大家とした 農業体験農園×コレクティブハウス

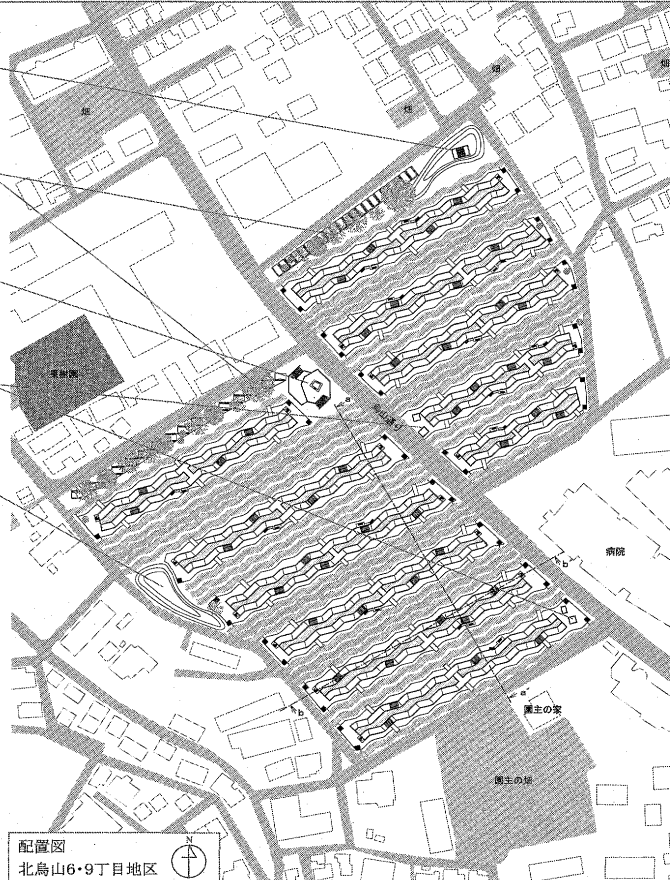
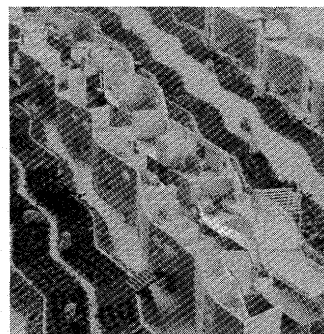
- 農業
- ×
- コミュニケーション
- ×
- 開発
- ×
- 保存

全体計画

全体の配置計画は
既存の畑の「畝」の
方向を踏襲して
決定しました

住宅だけでなく
地域に開かれた
施設も計画しました

- クラ**
農のライブラリ&タワー
農業に関する本が高く積まれた図書館兼農望台
- ヤシキリン**
防風林&パーキング(38台)
武蔵野の原風景 木陰は駐車場になっている
- カマヤ・イロリパタ**
1階: かまどのある土間(竈屋)
2階: 獲れた野菜が食べられるレストラン(囲炉裏端)
- ナヤ**
野菜直売所
収穫された野菜が買える 敷地内に2か所
- ホシバ**
広場・イベントスペース
GL-1850mmの広場 住民と同じ目線を味わえる



配置図
北鳥山6・9丁目地区

畝のある風景

平面ダイアグラム

デザインのキーワードは「畝」(うね)
平面にも断面にもうねがあらわれます

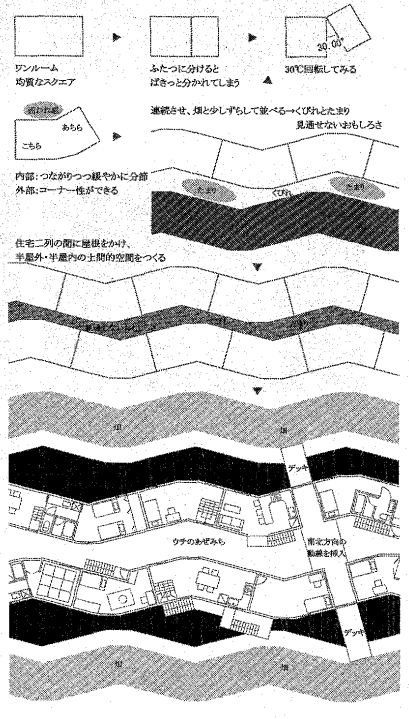
畑の面積から住宅の面積を決定し、平面的にうねらせることで魅力的な内外空間をつくりました

特徴的な共有スペース
ウチのあぜみち
ソトのあぜみち
ヤネのあぜみち(屋上)ができました



畑	ルームの基準面積 15㎡
---	-----------------

畑クラインガルデンでのOリング-居住研究より、住宅と畑は近い方がいいとわかった
→自分の家から自分の畑が見える計画
リサーチより、畑の専有面積は15㎡を基準とする
→ルームの基準面積も15㎡とする



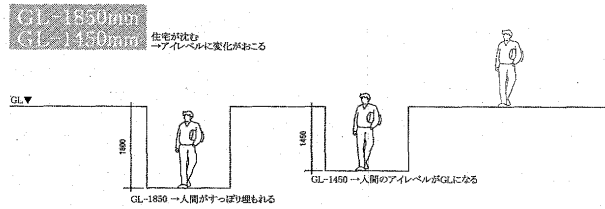
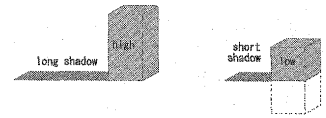
断面ダイアグラム

都市農地での問題点:日照
住宅が密集する市街地での農業は、近隣の住宅の影が問題です

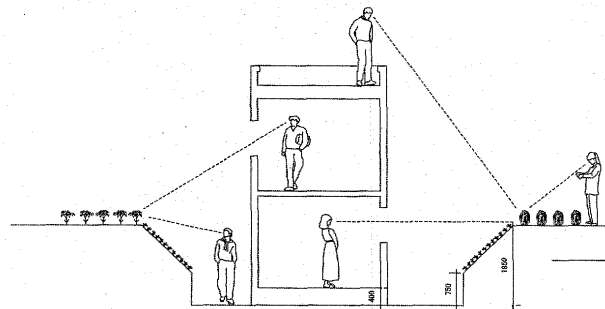
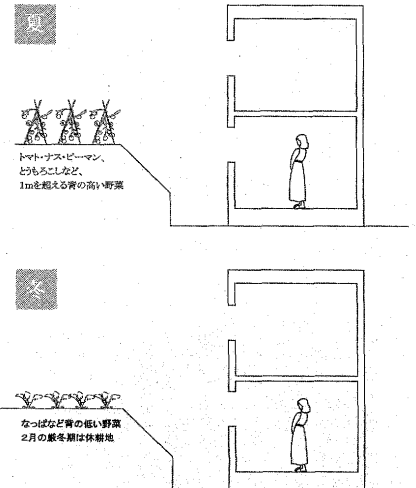
住宅を沈めることによって様々なレベルから、畑を眺めることができるようになりました

畑と住宅が連続する断面は畑の畝のようです

自分の畑を自分の家から見たい⇔なるべく農地に影を落とさない
相反する欲求を解決する方法……住宅を沈める

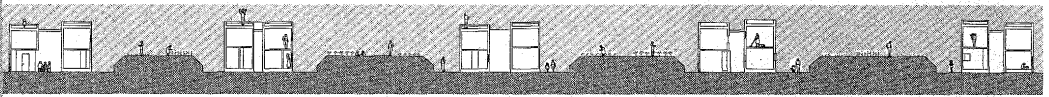


季節によって変化する風景



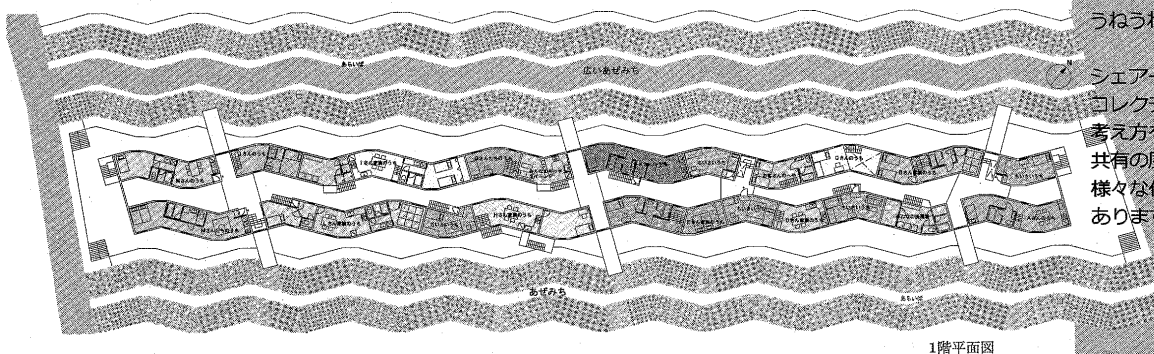
GLから1850mm下げ、45度にかけて日照を確保。のり面には日陰でも青ちやすいんぎやユウガ、ミントなどを植える。これらは一皮植えたら毎年収穫できる。

畝のある風景

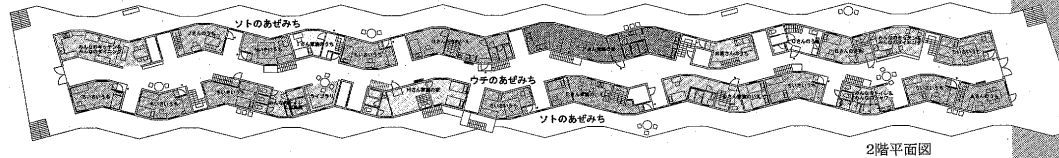


a-a' 断面図

平面図



1階平面図



2階平面図

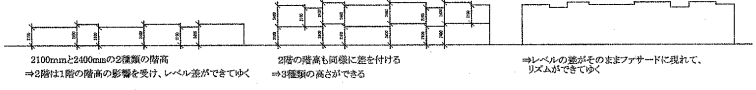
うねうねとつながった住宅
シェアード型
コレクティブリビングの
考え方を取り入れて
共有の度合いの違う
様々な住宅が
あります

住戸専有面積
17.2㎡~68.8㎡
農地専有面積
15㎡~34.4㎡
家族構成1~4人

断面図

畑に影を落とさない
⇒高さをなるべく抑えたい

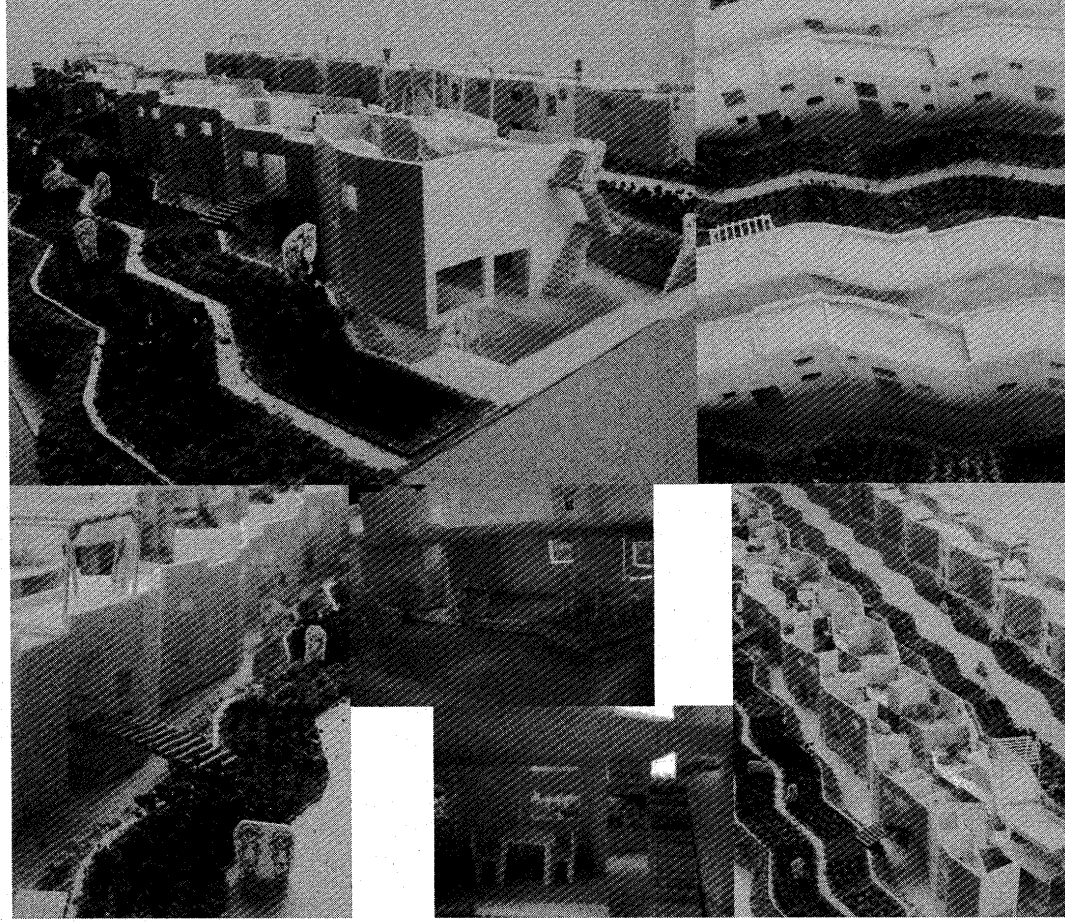
階高は建築基準法最低ラインの2100mmと
+300mmの2400mmの2種類とし、
平面的に考えた「つながり」をゆつゆと分断することを
断面的にも考慮する。
レベルにさらに場所性を。



みなで使える箇所
設備をもたないうち 仕事場としての利用や、うちが空くなったときに誰かの「よ」にも使える、やがて生活がほんぽんぽん影がれていく。

14戸の「ちいさいうち」
設備は何もありません
プランの違う14戸と
合わせて一棟に28戸

畝のある風景



敷地面積：37,303㎡
建築面積：9,457.3㎡
延床面積：16,674.8㎡
農地面積：7,983㎡
総戸数：281戸

敷地周辺の
面積に対する
農地の割合
8.1%

敷地周辺の
面積に対する
建築面積の割合
18.3%

畝のある風景の
敷地面積に対する
農地の割合
21.4%

建蔽率25.3%
容積率244.7%

畝のある風景

■まとめ

今回、地域に暮らす住民でも初めて屋敷林を訪れた人が多かった。特に新しく住みはじめた近隣のマンション住民の方々から「近所にこんなところがあるなんて知らなかった」などの意見が数多く寄せられた。

みどりは単に残せばよい、というものではない。主がいて、きちんと管理されていればこそ、地域の資産になりうる。「屋敷林オープン・ガーデン&ハウス」を行うことで地域の交流の場をつくるきっかけができたと考えられる。今回の企画は屋敷林という場所が地域コミュニティの核となりうる可能性を示していたように思う。

また、ポテンシャルのある空間を顕在化させ、有効に使いながら生き活きと残す方法を実際の場で体験させていただいたことは、学生にとって大変よい機会となった。ご協力いただいた方々に感謝申し上げたい。

■参考文献

- 1 「リノベーションの現場 協働で広げるアイデアとプロジェクト戦略」五十嵐太郎+リノベーション・スタジオ 編 (テーマ7 美術とリノベーション「居場所をつくる—サイト・リノベーション」 pp 252-67, (杉浦久子発表, 著作) 2005年 彰国社

■掲載, 発表記録

- 1 新建築 2007年10月号
WORKS クモの巣がつくる屋敷林を楽しむ空間 杉浦久子 Cobweb 設計施工: 杉浦久子+昭和女子大学 杉浦研究室 掲載ページ: p 44
- 2 昭和女子大学現代GP〈環境〉平成18年度・19年度活動報告書 せたがやの環境共生の人づくり・街づくり～地域とつくる継続的な次世代リーダー育成プログラム～ 世田谷でのフィールドワーク「せたがや家・庭・訪問」他 杉浦久子 掲載ページ: pp 1-12, pp 104-7
- 3 世田谷ライフ 2007年 No. 22号
光と風が通り抜ける林で蜘蛛の巣ハンモックにたゆたう 清水麻里 掲載ページ: pp 108-11
- 4 建築雑誌 2008年4月号 拡張する「私んち」? サイト・リノベーション 杉浦ゼミフィールドワーク 2007 cobweb (クモの巣) project 北烏山9丁目の私んち 杉浦久子 掲載ページ: pp 10-11

本稿は、「■掲載, 発表記録」2に基づき、清水麻里による修士設計概要他を加筆、再構成したものである。

(すぎうら ひさこ 生活環境学科)

(しみず まり 生活機構研究科平成19年度修了生)